

平成20年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ハタハタ

学名 *Arctoscopus japonicus*

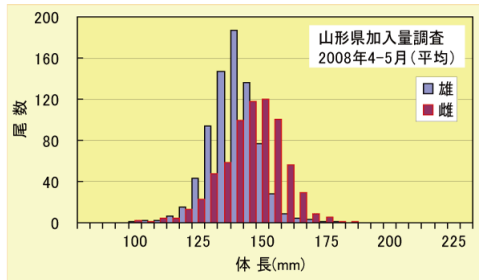
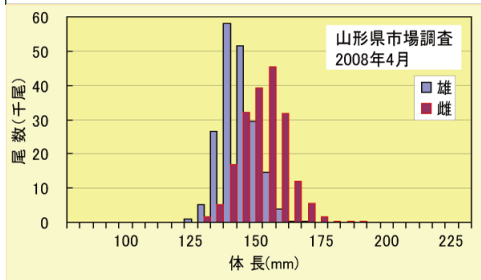
系群名 日本海北部系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 5歳(年齢は、ふ化した年を基準に暦年で示す)
成熟開始年齢: 雄:1歳(100%)、雌:2歳(100%)
産卵期・産卵場: 12月の極短い一時期、沿岸の藻場、秋田県での産卵が多い
索餌期・索餌場: 未成魚期以降の分布と回遊に関する知見は少ない
食性: 端脚類、橈脚類、オキアミ類、イカ類、魚類
捕食者: 大型魚類によって捕食されるが、詳細は不明

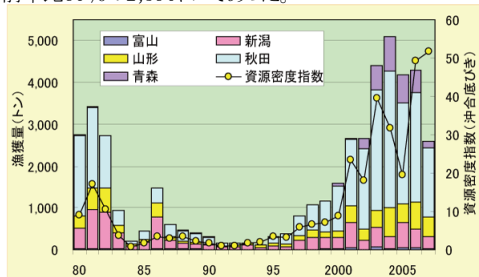
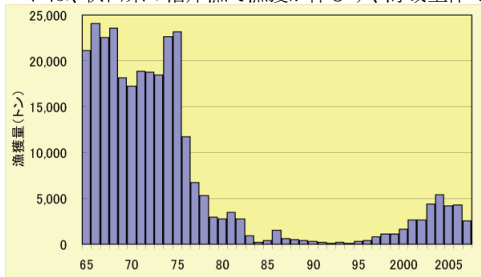


漁業の特徴

日本海北部のハタハタは秋田県での漁獲が多く、産卵・接岸期を対象とした定置網と刺し網による漁獲割合が大きい(沿岸漁)。また、ほぼ全域において小型底びき網や沖合底びき網によって漁獲される。

漁獲の動向

当海域におけるハタハタの漁獲は1965～1975年には20,000トン前後の高い水準にあったが、1976年以降激減し、1991年には158トンにまで落ち込んだ。秋田県は3年間の採捕禁止(1992～1995年)を実施し、その後も青森～新潟の各県では自主的・公的な漁獲規制を実施している。このような措置の下で、近年漁獲量は増加傾向にある。2007年には、秋田県の沿岸漁で漁獲が伸びず、海域全体で前年比60%の2,590トンであった。



資源評価法

漁獲量の推移とともに、沖合底びき網漁業漁獲成績報告書に基づく漁場別漁獲統計を解析し、1980年以降の資源密度指数*の推移を調べた。加えて、秋田県、山形県、新潟県の市場調査及び加入量調査における体長組成から、近年の加入状況と漁獲物の年齢構成を考察した。
*資源密度指数: 10分マス目で設定された漁区ごとの月別CPUE(漁獲重量(kg)/ひき網回数)を一定期間(年または月)、ある海域内(中海区または小海区)で集計した値を有漁漁区数で除したもの。

資源状態

日本海北部のハタハタ資源は、近年の全般的な漁獲動向と各年級の豊度等から、1990年代前半に比べて明らかな回復を示している。2007年の漁獲量は前年の6割程度に減少したが、年末の沿岸漁では魚体が小さかったために漁が大幅に自粛されたこと、底びき網では大型魚(4-5歳と考えられる)中心の漁獲が続き、沖合底びき網による資源密度指数が近年の最大値を示したこと、さらに2006年級の豊度が高いと考えられることから、資源は引き続き中位水準で横ばい傾向にあると判断した。2008年現在、北部海域ではやや小型の2歳(2006年級)のみが漁獲されているが、年末の接岸時期に向けて相当量の資源が本海域で維持されるものと思われる。



管理方策

ハタハタの日本海北部系群は、近年、豊度の高かった2003年級と2004年級に支えられ、2007年までは高い水準にあったと思われる。2008年になると高齢魚が見られなくなったが、2歳魚(2006年級)がかなりの現存量でこの海域に分布していると思われる。3歳魚(2005年級)への期待がほとんどできなくなったこと、また今後加入する1歳魚(2007年級)の動向が2008年初夏の段階では不明であることを考慮して、漁獲量の上限をやや低めにおさえ、2006年級を大事に利用することを心がける必要がある。

	2009年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	2,700トン	0.8Cave2-yr	—	—
ABCtarget	2,200トン	0.8・0.8Cave2-yr	—	—

- 100トン未満を四捨五入

資源評価のまとめ

- 漁獲量は、漁獲に関する自主的・公的規制のもとで増加してきた
- 2008年現在、1990年代初頭に比べてかなり高い水準にあるものの、その動向は横ばい状態にある
- 2006年級の豊度は高いが、2005年級以前の高齢魚は漁場から消え、今後加入する2007年級の動向は不明である

管理方策のまとめ

- 漁獲量のある程度おさえ、資源の保全に努めることが重要
- 2006年級を大切に利用することが肝要
- 水産庁では2003年7月に「資源回復計画」を作成

資源評価は毎年更新されます。